

修士論文（要旨）
2019年1月

大学生の友人関係における自己開示の特徴と
その友人関係満足度及び孤独感との関連

指導 井上 直子 教授
心理学研究科
臨床心理学専攻
217J4003
岩崎 美樹

Master's Thesis(Abstract)
January 2019

A Study of Self-Disclosure in Undergraduate Student Friendships
and Its Relationship with Friendship Satisfaction and Loneliness

Miki Iwasaki
217J4003
Master's Program in Clinical Psychology
Graduate School of Psychology
J. F. Oberlin University
Thesis Supervisor: Naoko Inoue

目次

| | |
|--|----|
| 第1章 問題と目的..... | 1 |
| 1.1 青年期の友人関係..... | 1 |
| 1.2 自己開示の定義..... | 2 |
| 1.3 自己開示の機能と性差..... | 2 |
| 1.4 自己開示の内容の深さ..... | 3 |
| 1.5 自己開示と孤独感..... | 4 |
| 1.6 自己開示欲求..... | 5 |
| 1.7 目的と意義..... | 6 |
| 1.8 仮説..... | 6 |
| 第2章 方法..... | 6 |
| 2.1 調査対象者..... | 6 |
| 2.2 調査時期..... | 6 |
| 2.3 調査方法..... | 6 |
| 2.4 調査用紙の構成..... | 7 |
| 2.5 倫理的配慮..... | 8 |
| 2.6 分析方法..... | 8 |
| 第3章 結果..... | 8 |
| 3.1 分析対象者..... | 8 |
| 3.2 性差の検討..... | 8 |
| 3.3 男女別の各尺度間の相関..... | 12 |
| 3.4 男女別の自己開示欲求及び自己開示行動の下位尺度間の相関..... | 13 |
| 3.5 男女別の自己開示欲求及び自己開示行動の各下位尺度と友人関係満足度及び孤独感の相関..... | 15 |
| 3.6 性差を踏まえた自己開示4群における友人関係満足度と孤独感の違い..... | 16 |
| 第4章 考察..... | 19 |
| 4.1 大学生の自己開示に関する性差を踏まえた特徴（仮説1）..... | 19 |
| 4.2 性差および自己開示の深さを踏まえた自己開示と友人関係満足度及び孤独感との関連..... | 20 |
| 4.3 友人関係満足度と孤独感からみた自己開示の欲求と行動の高低による4群の特徴（仮説2）..... | 22 |
| 第5章 本研究のまとめ..... | 24 |
| 第6章 今後の課題..... | 25 |
| 謝辞..... | 26 |

引用文献

- 資料1 教員への質問紙調査へのご協力のお願い
- 資料2 質問紙
- 資料3 質問紙調査実施への承諾書
- 資料4 研究計画書

第1章 はじめに

現代の青年期の友人関係は、希薄化しており、傷つくことを恐れ、深いかわりを避ける傾向があり（岡田，1995；松元，1997；岡田，2007），自己開示の欲求があっても，実際に自己開示できないために，友人関係に満足できず，孤独感を抱えている可能性がある。そのため，本研究では自己開示欲求と行動，そして自己開示欲求と行動の差に着目し，現代の青年の友人関係満足度や孤独感について検討することとした。

第2章 目的

本研究では，青年期にあたる大学生が友人に対してどのような質の自己開示をどのくらいしたいという欲求を持ち，実際にどのくらい自己開示の行動をとっているかを調べ，自己開示欲求と実際に行っている自己開示行動の差を含めた特徴を把握した。そのうえで，青年期にあたる大学生の自己開示欲求と自己開示行動，そして両者の差が友人関係の満足度と孤独感にどのように影響するのかについて検討することを目的とする。その際には，自己開示の内容の深さや性差も踏まえた検討を行った。

第3章 方法

東京都内にある私立大学に在籍する大学生男女 763 名を対象とし，質問紙調査を行った。回収した質問紙は 488 部（回収率 63.96%）であり，そのうち 25 歳以上の学生，非回答，一部欠損など除いた 303 部を（有効回答率 62.09%）分析対象とした。その内訳は，男性 125 名，女性 178 名，平均年齢は女性 19.69（SD=1.16）歳，男性 19.84（SD=1.14）歳であった。

なお，質問紙は，表紙と年齢，性別を尋ねる項目に加えて，自己開示の内容の質的側面を意識した丹羽・丸野（2010）の「自己開示の深さを測定する尺度」を改変した自己開示の欲求を測るための「自己開示欲求尺度（24 項目）」と自己開示の行動を測るための「自己開示行動尺度（24 項目）」，友人関係の満足感を主観的にどのように感じているかを測るための「友人関係満足度（1 項目）」（吉岡，2001），孤独感を測るための「改訂版 UCLA 孤独感尺度日本語版（20 項目）」（諸井，1992）の 4 つの尺度から構成されている。

分析には SPSSver23.0 を使用し，自己開示欲求，自己開示行動，および自己開示欲求と行動の差について男女差の検討を行うために， t 検定を行った。そのうえで，自己開示欲求，自己開示行動，および自己開示欲求と行動の差が性別あるいは自己開示の深さ（レベル I～IV）によって異なるかを検討するために，それぞれ 2 要因の分散分析を行った。その後，自己開示欲求及び自己開示行動の下位尺度間の関連を検討するため，男女別に相関分析をおこなった。また，自己開示の深さレベルによって友人関係満足度や孤独感に違いがみられるかを検討するために，自己開示欲求，行動，自己開示の欲求と行動の差と，友人関係満足度および孤独感との相関分析を行った。最後に，性差を踏まえた自己開示 4 群における友人関係満足度と孤独感の違いを検討するため，性別と自己開示 4 群（HH 群、HL 群、LL 群、LH 群）を独立変数とし，友人関係満足度と孤独感を従属変数として，2 要因の分散分析を行った。

また本研究は，桜美林大学の研究倫理委員会へ審査を申請し，研究の許可を受けた上で実施した。（承認番号：18001）

第4章 結果および考察

その結果、現代の大学生の自己開示の特徴として男性より女性の方が実際に自己開示を行っていることが明らかになった。下位尺度でみると、自己開示の深さのレベルが「Ⅰ. 趣味」>「Ⅱ. 困難な経験」「Ⅲ. 決定的ではない欠点や弱点」>「Ⅳ. 否定的な性格や能力」の順で欲求が高く、行動が多いことが示唆された。また、男女ともに自己開示の欲求が高いほど自己開示を行う特徴が+あるが、深さのレベルでみると、男性では「Ⅲ. 決定的ではない欠点や弱点」及び「Ⅳ. 否定的な性格や能力」の欲求の高さと「Ⅰ. 趣味」の自己開示の行動の間には関連がみられず、女性では「Ⅳ. 否定的な性格や能力」の欲求の高さと「Ⅰ. 趣味」の自己開示の行動には関連がみられなかった。また、自己開示欲求と行動のズレについて「Ⅰ. 趣味」のみ欲求よりも自己開示行動を行うようなズレの傾向があり、「Ⅱ. 困難な経験」や「Ⅲ. 決定的ではない欠点や弱点」、「Ⅳ. 否定的な性格や能力」については、実際の自己開示行動よりも欲求を高いようなズレの傾向があることが明らかになった。

自己開示欲求及び自己開示行動と友人関係満足度及び孤独感の関連について、探索的に検討を行ったところ、自己開示欲求は男女ともに友人関係満足度との間には関連がないが、男性のみ孤独感との間に関連があり、男性は自己開示の欲求が高いほど孤独感を感じない傾向があることが明らかになった。深さのレベルで見ると、女性では「Ⅰ. 趣味」の自己開示欲求が高ければ、友人満足度も高い傾向があり、男性では「Ⅰ. 趣味」、「Ⅱ. 困難な経験」、「Ⅲ. 決定的ではない欠点や弱点」の自己開示欲求が高いほど孤独を感じておらず、女性では「Ⅰ. 趣味」を自己開示する欲求が高いほど、孤独を感じていないという傾向があった。また、自己開示行動については男女ともに友人関係の満足度及び孤独感と関連があり、自己開示行動を行うほど男女ともに友人関係の満足度が高く、孤独感を感じていないことが明らかとなった。深さのレベルで見ると、「Ⅰ. 趣味」について実際の自己開示行動が女性では友人関係の満足度を高め、そして男女ともに孤独感を低めることが示唆された。欲求ー行動については、友人関係満足度及び孤独感と関連があり、実際の自己開示行動よりも自己開示欲求の方が高く、自己開示欲求と行動に差がある場合、友人関係に満足できず、孤独感を感じる傾向があることが示唆される。深さのレベルでみると、女性は、「Ⅰ. 趣味」、「Ⅱ. 困難な経験」、「Ⅲ. 決定的ではない欠点や弱点」、「Ⅳ. 否定的な性格や能力」のすべてにおいて、行動よりも欲求の方が高くズレが大きくなるほど友人関係満足度が低くなり、孤独感も高くなる傾向があることが明らかとなった。また、男性は、「Ⅰ. 趣味」、「Ⅱ. 困難な経験」、「Ⅲ. 決定的ではない欠点や弱点」が行動よりも欲求が高くズレが大きくなるほど友人関係満足度が低くなり、「Ⅰ. 趣味」、「Ⅲ. 決定的ではない欠点や弱点」、「Ⅳ. 否定的な性格や能力」が行動よりも欲求が高くズレが大きくなるほど孤独感を感じる傾向があることが示された。

自己開示欲求と自己開示行動の高低で4群に群分けし、性別と4群間での友人関係満足度と孤独感の関連について検討した結果、自己開示4群との間にのみ有意な差が認められ、自己開示欲求が高く、自己開示行動が高い群（HH群）の方が自己開示欲求が低く、自己開示行動が低い群（LL群）よりも友人関係満足度が高く、孤独感が低いことが明らかとなった。したがって、自己開示に対する欲求が高く、実際の自己開示行動も多く行っている人は、自己開示に対する欲求が低く、自己開示をあまり行っていない人に比べて、今の友人関係に満足し、孤独感を感じていないことが示唆される。

引用文献

- Altman, I., & Taylor, D.A. (1973). *Social Penetration*. New York; Holt, Rinehart Winston.
- Berg, J. H., & Peplau, L.A. (1982). Loneliness: The relationship of self-disclosure and androgyny. *Personality & Social Psychology Bulletin*, 8, 624-630.
- Blos, P. (1962). On adolescence: a psychoanalytic interpretation.
(野沢栄司 (訳) (1971). 青年期の精神医学 誠信書房)
- Chelune, G.J., Sultan, F. E., & Williams, C.L. (1980). Loneliness, self-disclosure, and interpersonal effectiveness. *Journal of Counseling Psychology*, 27, 462-468.
- Cozby, P.C., (1972). Self-disclosure, reciprocity and liking. *Sociometry*, 35, 151-160.
- 大坊郁夫 (1998). しぐさのコミュニケーション——人は親しみをどう伝えあうか—— サイエンス社
- Darlena, V.J., Metts, S., Petronio, S., & Margulis, S, T. (1993). Self-Disclosure.
(齊藤勇 (監訳) (1990). 人が心を開くとき・閉ざすとき——自己開示の心理学——金子書房)
- 馬場禮子・永井徹 (2016). ライフサイクルの臨床心理学 培風館
- 榎本博明 (1987). 青年期 (大学生) における自己開示性とその性差について 心理学研究, 58, 91-97
- 榎本博明 (1997). 自己開示の心理学研究 北大路書房
- 榎本博明・清水弘司 (1992). 自己開示と孤独感. 心理学研究, 63, 114-117.
- 遠藤公久 (1994). 自己開示における抵抗感の構造に関する検討 筑波大学心理学研究, 6, 191-197.
- 遠藤公久 (1996). 自己開示における抵抗感の規定因に関する研究. 筑波大学博士 (心理学) 学位論文.
- Erikson, E. H., & Erikson, J. M.. (1997). *The life cycle completed : A review expanded edition*.
(村瀬孝雄・近藤邦夫 (訳) (2013). ライフサイクル, その完結 みすず書房)
- 福重清 (2006). 若者の友人関係はどうなっているのか 浅野智彦 (編) 検証・若者の変貌 失われた10年の後に 勁草書房
- Jourard, S. M. (1971). *The transparent self*.
(岡堂哲雄 (訳) (1983). 透明なる自己 誠信書房)
- 松元泰儀 (1997). 人間関係の変化 加藤隆勝・高木秀明 (編) 青年心理学概論 (pp. 98-143) 誠信書房
- 森田・井上直子 (2014). 大学生の友人関係における自己開示の深さと自己開示抑制の理由の関連——親しさの違いと性差に着目して—— 桜美林大学心理学研究, 5, 65-74.
- 森脇愛子 (2005). 抑うつと自己開示の臨床心理学 風間書房
- 諸井克英 (1992). 改訂版 UCLA 孤独感尺度の次元性の検討 静岡大学文学部人論集, 42, 23-51.
- Mulcahy, G. A. (1973). Sex differences in patterns of self-disclosure among adolescents : A Developmental Perspective. *Journal of youth & Adolescence*, 2, 4,

343-356.

- 中村雅彦 (1984). 自己開示の対人魅力に及ぼす効果 心理学研究, *55*, 131-137.
- 中村雅彦 (1986). 自己開示の対人魅力に及ぼす影響(3) ——開示内容次元と魅力判断次元の関連性に関する検討—— 心理学研究, *57*, 13-19.
- 岡田努 (1995). 現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察 教育心理学研究, *43*, 354-363.
- 岡田努 (2007). 現代青年の心理学——若者の心の虚像と実像—— 世界思想社
- Pedersen, D. M., & Higbee, K. L. (1969). Personality correlates of self-disclosure. *Journal of Social Psychology*, *78*, 81-89.
- Rawlins W. K. (1983). Openness as problematic in ongoing friendships: Two conversational dilemmas. *Communication Monographs*, *50*, 1-13.
- 丹羽空・丸野俊一 (2010). 自己開示の深さを測定する尺度の開発 パーソナリティ研究, *18*, 196-209.
- 曾我部裕介・小関俊祐 (2015). 大学生の友人における自己開示と友人に抱く印象との関連 ——自己開示の深さ, 友人との親しさ, 主観的類似度, 信頼感, 好意度に注目して—— ストレス科学研究. *30*, 77-82.
- Solano, C.h., Batten, P.G., & Parish, E.A. (1982). Loneliness and patterns of self-disclosure. *Journal of Personality & Social Psychology*, *43*, 524-531.
- Storke, J., Fueherer, A., & Childs, L. (1980). Gender differences in self-disclosure to various target persons. *Journal of Counseling Psychology*, *27*, 192-198.
- 高垣忠一郎 (1988). 自分をつくる 心理学研究会(編)かたりあう青年心理学 (pp. 55-82) 青木書店
- 和田実 (1990). 青年の対人関係の変容 久世敏雄(編) 変貌する社会と青年の心理 (pp. 83-102) 福村出版
- 和田実 (1995). 青年の自己開示と心理的幸福感の関係. 社会心理学研究, *11*, 11-17.
- 吉岡和子 (2001). 友人関係の理想と現実のズレ及び自己受容から捉えた友人関係の満足感 青年心理学研究, *13*, 3-30.